発行：令和５年３月１４日　秋田県産米改良協会

発芽ムラが出ないよう種子予措をしっかりと行いましょう！

栽培管理記録・ほ場管理野帳は記載もれが無いように徹底を

１　種子予措

・ 原種の年産を確認のうえ行うこと。、特に、貯蔵期間が長い種子は乾燥が進んでいるので水選方法や浸種時間、水温等に注意すること。

・ 種子伝染性病害の感染を防ぐため、原種と一般用種子とは一緒に浸種及び催芽をしない。

（１）供給される原種の年産と水選方法

農業試験場から供給される原種紙袋の表示内容を確認のうえ水選を行う。

原種年産	品　種　名	水選方法
２年産	あきたこまち、めんこいな、ゆめおばこ、サキホコレ、美山錦	水　選
３年産	あきたこまち、ひとめぼれ、秋のきらめき、秋田６３号、秋田酒こまち、きぬのはだ	水　選
４年産	つぶぞろい、淡雪こまち、たつこもち	塩水選

※）2年産、3年産原種は通常塩水選では種子籾が浮きすぎるため、真水で選別する。

（２）種子消毒

① モミガードＣ水和剤を乾籾種子重量の0.5%湿粉衣する。（乾籾10kgに水和剤50gをまぶす）。

② 湿粉衣後は風通しのよい日陰で完全に乾かす。

③ 育苗時には原種苗と一般用苗は同じハウスで管理しないこと。やむを得ず同じハウスで管理する場合は、原種と同様の薬剤を使用する。

（３）浸　種

① 種子消毒剤の効果を高めるため、水温 10 ℃～ 15 ℃を確保できる 4 月上旬頃を目安に浸種を始める。（水温が 10 ℃以下となった場合は休眠が深まる場合があるので常に水温の計測を怠らないこと。）

② 種子袋に入れる種子は容量の 50 ～ 60 %程度とし、品種を間違えないよう種子袋の色等で識別ができるように工夫する。

③ 浸種の水槽は大きめな物を使用し、種子もみ 1kg に対して水 3.5L を目安とする。

④ 浸種開始後２日間は水交換や循環をせず、消毒剤濃度が高い状態にし、その後の水交換は２～３回とする。

⑤ 浸種期間は浸種水温 10 ℃で 6 日～ 8 日、14 ℃で 6 日程度とし、籾殻を透かして胚が白く見えるようになった時が浸種終了の目安とする。特に、貯蔵種子は当該年産種子よりも浸種に時間がかかる傾向にあるため注意する。

（３）催　芽

① 発芽を均一にするために 30 ～ 32 ℃で行う。その際、内部の種子まで均一な温度となるよう予め 36 ～ 40 ℃の温度で湯通しを行う。

② 催芽中は水分を切らさないようにし、芽の長さはハト胸程度（1 mm）とする。その際、種子袋表面だけでなく内部の発芽も確認する。

③ 発芽ムラが見られる場合は、発芽の遅い種子が芽切れするまで十分に行う。

④ 品種や年産により発芽速度が異なるので発芽程度を十分観察して催芽を終了する。

２　床土の準備

・病害虫発生防止のため、育苗床土及び覆土に、もみがら資材を混入しないこと。また、育苗ハウス内や付近には稲わら等を置かないこと。

３　育苗期防除

（１）ムレ苗（苗立枯病）：次の①～③のいずれかで防除を行う

① 床土にタチガレエースM粉剤６ｇ/箱を混和する。

② 播種時覆土前に同液剤の1,000倍液を500ml/箱をかん注する。

③ 出芽後に同液剤の500倍液を500ml/箱をかん注する。

※ タチガレエース粉剤は播種５日前までに混和する。

（２）リゾープス（苗立枯病）

・播種時覆土前にダコニール1000の500倍液を500ml/箱をかん注する。

（３）育苗期いもち病

・緑化始期にビームゾル500倍液を500ml/箱をかん注する。

（４）ばか苗病

・発病が確認されたら直ちに抜き取る。

・出芽時に低温にならないように注意する。

（５）もみ枯細菌病

・カスミン粒剤20ｇ/箱を覆土１Ｌに混和するか、30ｇ/箱を床土に混和する。

・出芽までの温度は32℃を超えないようにし、被覆期間を過剰に長くしない。

・緑化期以降は温度管理をこまめに行い25℃以上にしない。

４　播　種

（１）種子は適度に水切りし、播種精度を高める。

（２）播種前に育苗箱（床土）へ十分灌水し、均一播種に努める。

（３）覆土は無肥料を使用し、覆土深は５㎜位とし覆土後の灌水はしない。

５　栽培管理記録等の記載

（１）生産履歴を確認できるよう、配布される用紙にその都度記載すること。

（２）作業が終わったら記録用紙を速やかにＪＡへ提出すること。

たね屋から　ひとこと

○　今年も高品質の種子生産に取り組みましょう。

○　今年の「あきたこまち」の原種は例年と違い、低温貯蔵期間が長いので、種子予措には、その点に留意して行いましょう。

次号　育苗期編は４月上旬発行予定です。